

## 本学卒業生からのメッセージ 青年海外協力隊の経験を活かして

6月26日の「フレッシューズセミナー」で講師を務めた藤本さんは、卒業後に出かけたネパールで、2015年4月の大地震に遭い、空港も閉鎖されて出国できなかったと言う経験もしたが、ネパールの国が好きになりこうした国に住みたいと思うようになったそうです。海外の国に長期滞在する方法として青年海外協力隊（以下、協力隊）を知り、帰国後協力隊に応募し、中米のコスタリカに派遣されました。国家保全地域機構で国の北部を管轄するグアナカステ保護区域生物教育部門に配属され、次のような活動をされました。

1. 近隣の小学生（4年生～6年生）に国立公園で生物教育する
2. 指導案の作成及び改定、マテリアルの補強
3. コンポストの内容を含む環境教育の巡回型の授業
4. 国立公園内の廃棄物の適切な処理方法

帰国後は再びスペイン、モロッコなどを旅行し、「砂漠か世界一高い山に登りたい、色々な国に行ってみたい」という学生時代の夢を一つ一つ実現しています。現在は、環境省日光国立公園管理事務所でアクティブレンジャーとして働き、次の夢の実現に向けて新たな経験を積んでいるとのことでした。

こうした藤本さんの生き方を聞いて、受講生は、「本当にやりたいと思って行動すれば、何でも出来るのだと思った。」「自分の考えでやりたいことをしっかり行動に移しているのを知り、自分も見習うべきだと思った。」などと感想を述べています。

7月9日の「産業動物獣医総合臨床」で講師を務めた竹田さんは、卒業後タイに渡り旅行代理店で働き、帰国後にはより高い専門性を身につけるため大学院で海洋生物学の研究を続けました。その専門性を活かすため海外協力隊に応募しましたが、合格するまで3回チャレンジしたそうです。

ジブチでは、お金がない、モノがない、移動手段がない、人材がないという「ジブチの4無い」に悩まされながら、色々な工夫でそれを乗り越え次のような活動をされました。

1. 海洋保護区管理に資する生態調査（サンゴ礁・マングローブ生態系の調査、漁業調査）
2. 陸上生態系保全に資する生態調査（鳥類の固有種・希少種調査、移入植物の調査）
3. 環境教育

現地紹介では、クイズ形式で学生に質問しながら、私たちには馴染みの少ないジブチについて分かり易く紹介されました。

協力隊活動を通して国際協力の面白さを知り、帰国後はJICAの専門家として、既にパラオ、エチオピアで国際協力の現場で活躍され、現在は、博士課程でより高度な専門性を身につけ、世界に貢献できる専門家を目指しておられます。来年には南太平洋のミクロネシアに専門家として赴任される予定です。

JICA 専門家の経験も踏まえ、世界の国々の格差を実感されている竹田さんから、「貧しい人とは少ししかものを持っていない人ではなく、もっともっとといくらあっても満足し

ない人のことだ」との先人の言葉が紹介され、格差を生み出している私たちの生き方、考え方への貴重なメッセージが伝えられた。

竹田さんの講義に対して、学生の一人は「私もいつか海外で人のために何かできることをしたいと考えていますが、それ相当の心意気が必要だなと改めて感じました。自分が一生懸命学んできたことがいつか日本だけでなく世界に役立つことが出来たら素晴らしいです。」との感想を聞かせてくれました。

お二人の講義からは、視野を広くし、世界の現状にも目を向けながら、将来の進路を柔軟に考えて欲しいという、後輩への共通した後輩へのメッセージが感じられました、

学生達の感想には、「普段の授業では聞けないような国際という大きいスケールのお話が聞けてとても興味を持った、面白かった。」、「青年海外協力隊のことを初めて知った。海外で仕事をするのは大変だけれど、良い経験になると思った。」などと新鮮な講義内容に関心を持つと共に、「自分が今どれだけ豊かな生活が出来ているのかを再確認できた。」、「世界には私たちのような生活が出来ない、学校に通えない人が数多くいて、そうした人々を支援する活動があるのを知った。自分も将来、少しでもそうした支援を出来るようになりたいと思った。」などと、開発途上国の人々の貧困と引き比べて自分たちの恵まれた生活を確認できたようです。話の内容を理解するだけでなく、先輩達の経験を自分の将来に重ね合わせる意見も多くみられました。この出前講義を通して、国際協力や協力隊に関心を持ち、将来の進路の一つとして竹田さんや藤本さんに続く人が出てくれば心強いと思います。